

## 細野伸二君遭難事故仮報告書

一橋大学山岳部

8月17日 針葉樹会主催の報告会で報告、その後一部修正

8月23日 印刷、発送

なお、細野君ご家族には、17日にお渡しした(修生前)

※本仮報告書は、平成2年2月1日に発行された正式の報告・追悼集

『追悼 細野伸二君 —— 剣岳遭難報告・追悼』

に、Ⅱ～Ⅷが全編収録されている。

### I. はじめに

去る8月12日、わたしたち山岳部は、人命にかかわるたいへんな遭難事故を起こしてしまいました。まず遭難者細野伸二君のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族の方々には心からお詫び申し上げます。救助・遺体の収容作業にかかわっていただいた富山県警察山岳警備隊をはじめその場に居合わせた登山パーティーの方々には、深く感謝いたします。事後処理にかかわっていただいた現地上市警察署、大学関係者、上市市の真敬寺、<sup>しんきやうじ</sup>その他のの方々にも、ご迷惑をおかけしたことをお詫びし、ご協力に対してお礼を申し上げます。針葉樹会に対しましても、事故を起こしてしまったことをお詫びし、事故当日の俊速な対応をはじめとしたお力添えに深く感謝いたします。そして、葬儀にご参拝いただきました、あるいは葬儀の際におくやみの言葉をいただきました山岳部および一橋大学関係の方々にも、この場でお礼を述べさせていただきます。

このたびの事故に際し、原因分析、反省および今後の対応策等については、わたしたち山岳部一同、十分に時間をかけて討議し、慎重に解答を導きだしてゆき、後日正式な報告書を発行する予定です。今回は、わたしたちがわかる事実関係のみに焦点を絞り、取り急ぎこのような報告書を作成いたしました。できるかぎり正確に記述したつもりですが、ご不明な点、お気づきの点がございましたら、ご面倒ですがご指摘くださるよう、お願い申し上げます。

1988年8月23日

一橋大学山岳部一同

### II. 遭難事故の概要

①遭難者: 細野 伸二 君 (以下敬称略)

法学部2年生(ただし大学および山岳部は3年目) 20歳(事故当時)

自宅: 埼玉県川越市大字下赤坂 189-2 TEL0492-43-5151 〒356

登山経験: 大学入学と同時に入部し、登山活動を開始。山岳部の全合宿に参加、昨年度には文部省登山研修所春山リーダー研修会にも参加している。今年4月以来、リーダー層のひとりであった。

②遭難事故発生日時: 1988年8月12日午前5時10分ごろ

③天候: 事故当時、くもり、弱風

④遭難場所: 剣岳源治郎尾根 I 峰平蔵谷側下部 中央ルンゼ取付手前

- ⑤事故内容:小野(チーフリーダー)、井上(サブリーダー)、細野の3人パーティーで中央ルンゼ～成城大ルート(岩登りルート)を目指している途中、取付へのルートを探すため雪渓をトラバース中スリップ、下方のラントクラフトに転落  
事故直後、意識不明、脈・呼吸停止、出血 その後死亡
- ⑥装備:事故当時使用していたのはピッケル  
ヘルメット、ハーネス、ザイルは使用せず  
アイゼンは、今合宿では携行せず
- ⑦応急処置:他パーティーの協力も得て、止血、人工呼吸、心マッサージを行う
- ⑧救助・遺体収容活動:他パーティーの協力により、剣沢の山岳警備隊に通報  
救助隊および医師到着  
雪渓の上に引き上げる、死亡確認  
平蔵谷出合までスノーボードで搬送  
平蔵谷出合より芦峠寺スキー場までヘリコプターで運ばれる
- ⑨連絡:山岳警備隊剣沢派出所を通じて、家族、大学、針葉樹会へ連絡
- ⑩遺体の取り扱い:上市警察署職員により検死後、上市町真敬寺に安置  
細野君のご家族が、自家用車で上市へ来られて、遺体と対面  
その夜のうちに遺体をお引取りになり、細野君の自宅(川越市)へ出発された。
- ⑪事故証明関係:事故証明書類の受け取りは、12、13日、石教授(山岳部長)が行う。
- ⑫他部員の行動:小野、井上は荷物撤収のため一旦真砂沢ベースキャンプに戻る。  
その後小野は遺体引取の立ち会いのため、12日、途中剣沢派出所、室堂派出所に立ち寄りながら下山。上市警察署に向かう。その後真敬寺へ。  
テントの撤収および1年生の下山は、井上が担当。12日のうちに剣沢へ行き、そこで小野と電話連絡、翌日の指示を受ける。13日、室堂へ下山、信濃大町経由で帰京、細野家に向かう。

### Ⅲ. 遭難事故経過

12日の天候は、深夜一時的に雨、起床時(3時)星空ただし雲あり、日中は晴ときどき曇り、15時ごろから雨、行動には支障がないと判断した。

3:00 起床

4:00 小野、井上、細野の3人パーティー、真砂沢ベースキャンプ出発。剣沢・平蔵谷の雪渓を登り、中央ルンゼルート取付点へ向かう。

3人とも健康状態良好。

1年生2名(岩原、坪井)は仙人温泉方面へ縦走に出発(4:30)

4:30 頃から、明るくなる。

- 5:00 頃 中央ルンゼ付近に達し、取付点を探し始める。十分明るい。
- 5:10 頃 事故発生
- 小野、井上は、二重遭難を避けるべく、慎重かつ迅速にその場から脱出  
両名、細野の名を呼ぶが、返答なし
- 井上、ラントクルフト内へ懸垂下降、細野を探す
- 井上は、懸垂下降の支点を支えつつ、他パーティーの協力を求める。この時点で東北大学パーティー(4名)が協力
- 小野、細野を発見する。顔面強打、特に左顎の損傷ひどい。出血確認。脈拍感じられず。呼吸もないと見受けられた。意識不明。
- 井上、ラントクルフト内へ下降
- 5:30 頃 人工呼吸(井上)、心マッサージ(小野、後で他パーティーの人と交替)行う
- ？ 左顎の損傷ひどく、人工呼吸には困難が感じられる
- 東北大学の吉木さん下降、応急処置を手伝う
- ※剣沢に救助依頼が届いた経緯および伝達方法について、詳細は不明であるが、以下の事実は確認されている。
- 東北大学パーティー、救助依頼のため剣沢とトランシーバーでの交信を試みるが、交信できず、平蔵谷出合まで下って連絡を取ろうとする。
- 5:40 頃まで、かすかに脈拍感じられ 45 分頃強く感じられる(吉木さんが確認)。その後もう一度脈拍感じられるが(小野、6:15 頃か?)以後ない。
- 千葉山の会ランタンのパーティーが救助依頼を行う。それを引き継いで、佐宗茂さん(小田原クライマーズクラブ)が救助隊に通報(平蔵谷出合～剣沢?)
- 顔面の出血の処置のため三角布等を当てるが、あまり効果ない
- 千葉山の会の人、応急処置に協力
- 小野は、心マッサージ変わってもらい、事故現場の様子を記録するとともに、連絡用のメモを作る。
- 体が冷えてきた模様なので、セーター、ツェルトを出し、保温する。
- 7:30 頃 救助隊、医師、ラントクルフト上部に到着
- ？ (到着の正確な時刻は小野に記録から欠落していて不明)
- 救助隊が、情報(事故者の身元など)を無線で剣沢山岳警備隊派出所に連絡。剣沢派出所を通じて、家族、大学へ連絡へ連絡
- さらに、仙人池へも無線連絡が試みられる
- 7:30 時点で、仮死状態(大阪寝屋川市の山田さんが判断)
- 7:50 救助隊員のひとり、細野の所へ下降してくる
- 救助隊の指示により、人工呼吸中止、スノーボードを使用し引き上げ
- 8:00 頃 医師により死亡確認
- その後、平蔵谷出合までスノーボードで搬送、協力者 10 数名

- 9:21 平蔵谷出合に富山県警のヘリコプター到着、遺体収容、上市方面へ向かう  
 小野、井上は、真砂沢のベースキャンプに戻る  
 小野はただちに上市へ下山、井上は1年生を待ち翌日下山することにする。

小野の行動記録	井上、岩原、坪井	在京連絡先、細野君ご家族
10:20 小野、真砂沢ベース キャンプを出発	10:15 井上。細野の荷物を 持ち、真砂沢へ帰幕	9:10 富山県警より一橋大 学学務課に事故の 連絡入る
12:40 剣沢へ到着 山岳警備隊剣沢派出 所に立ち寄る	天気回復、よく晴れる (それまでは曇)	学務課から石教授お よび佐藤活朗 OB に 連絡
13:50 交代のため下山する 警備隊員とともに、 小野、剣沢を出発	14:00 岩原、坪井(1年)帰幕 (途中で事故の知らせを 聞き急いで帰幕した)	細野君の家族は、自家用車で 上市へ向かう。
15:20 室堂到着、室堂派出 所に立ち寄る	食事をとらせ、下山準 備開始	12:00 頃。石教授、離京
16:00? 上市警察署のマイク ロバスで、小野、室 堂出発。上市警察署 へ向かう	15:37 井上、岩原、坪井、下 山開始。途中雨	13:30 頃。西牟田総務幹事と 河野 OB(63卒)離京
17:45? 上市警察署到着。こ こで石教授と合流 その後、真敬寺へ向 かう	18:15 剣沢到着、幕営 剣沢派出所へ出向き 真敬寺にいる小野と 電話連絡、翌日の指 示を聞く	16:30? 石教授、上市警察書 到着
西牟田 OB、河野 OB と合流	13日、天気晴	18:30 頃 西牟田 OB、河野 OB 真敬寺到着
20:30? 細野君ご遺族、真敬 寺に到着、遺体との 対面に立ち会う	6:10 剣沢を出発	20:37? 細野君ご遺族、真敬 寺に到着。遺体と対 面
21:30 細野君ご遺族の出 発を見送った後、上 市鉱泉(旅館)に宿 泊	9:40 室堂到着 アルペンルートを経由し、信濃 大町へ下山	21:30 細野君ご遺族、遺体 を引き取り、自宅へ 向けて出発
13日、河野 OB とともに 9:00 頃上市を発ち、帰京。細野家 に向かう	10:40 途中、大観峰駅で佐 藤活朗 OB に下山報 告	13日。18:00 からお通夜
	17:00 立川到着、佐藤 OB に 電話。身仕度をして細 野家に向かうよう指示 を受ける。国立にて解 散。細野家にむかう	

## IV. 事故の状況

### ①遭事故現場の地形

事故現場の地形については、別紙の写真1、図1、2の平面図および断面図を参照。図1、2は、小野が現場で取った記録をもとに、写真などを参考にして修正を加える等して作成したものである。写真1は、山と渓谷社『剣岳の岩場』に記載されている写真のうち、現場の地形の様子をよく伝えていると思われるものである。なお、雪渓の状態は年によって大きく変化するものであり、わたしたちが行ったときには、雪渓は、写真よりも細く、傾斜も急であった(と思われる)ことを付記する。

### ②事故発生時の3人の行動

図3参照。最初は、井上、細野、小野の順で平蔵谷を歩いてきたが、中央ルンゼに近付くと、3人がそれぞれ図に示したような軌跡をたどった。これは、中央ルンゼ取付へのルートを探すために、3人が別々に偵察を試みたためである。まず井上が右岸を偵察するがあまりよくないと判断、小野、細野に対してその旨伝える。細野はこれを受けて、雪渓をトラバースして左岸に見えるテラス状の岩に下りようと考えたようである(図3参照)。井上も、これと同じ見通しを立てたので、細野の後に続いた。一方小野は、なおも右岸にルートを探していたが、それが不可能であることを確認し、他の2人の後に続こうとする。こうして、事故発生直前には、細野、井上、小野の順となった。事故発生直前の3人の様子をスケッチしたのが図4である。

雪渓のトラバースにあたっては、ピッケルのヘッドを持ってピックを雪面に突き刺し、雪面に正対し、足を正面から蹴り込んでステップを切りながら進む方法をとった。しかし雪面は硬く、ステップはあまり深く切れなかった。

細野が滑落した地点からもうあと2メートル?もトラバースすればその下方にテラスがあり、細野はそこに下りられそうだったらしい。そして、滑落の時点で、すでに細野はテラスに向かって下り始めていたようである。滑落直前、細野は「アイゼンなしでは怖い所だ」とつぶやきながら進む。次の瞬間、細野は滑落した。足を滑らせたのか、ピックの差し替えに時にバランスを崩したのか、詳細は不明だが、そのままの姿勢を保ったまま、雪渓を滑った。新聞報道では「5メートル滑落」という書き方が多かったが、実際は3メートルぐらいしかなかったように思われる。そのため、ピッケルストップを試みる余裕など、まったくなかった。細野が「アッ」と一声叫んだ次の瞬間、細野の体は空中に飛び出し、細野の体は残る2名の視界から消え去った。雪渓が切れたその下は、完全な宙になっていたのである。(図2断面図参照) その後小野は、細野が岩にぶつかったらしい音と、ガレ場の石が転がるような音を確認している。

### ③事後処理、細野の傷害、および事故現場の状況

「細野」「大丈夫か」と一度コールをかけるが、小野、井上は、二重遭難をさけるべく、慎重かつ迅速にその場を離れ、何度もコールをかけるが、やはり返答はない。同時に下降地点を探したが、クライムダウンできる地点は見つからない。そこで、ピッケルを雪に打ち込んで、それを支点としてザイルを懸け、懸垂下降することにする。当然支点の崩壊が予想されるので、ひとり残って、ピッケルを押さえていなくてはならない。まず小野が下りることとし、井上は支点のピッケルを保持する。同時に、他パーティーに呼び掛けて協力を求める。

小野はまず、テラス状の岩に下り立った。細野が落ちたと思うわれる地点に行き、探すがそこには見つからない。そこで左後方を振り返ると、テラス状からさらに5メートル位下にあるガレ場の中に、細野が倒れているのが見えた。細野は左脇腹を見せ、うつ伏せるようになって倒れていた。細野のそばに行ってみると、頭部と顔面を強く打っているようで、血の流れた跡があった。意識がまったくないことを確認。脈拍は感じられず、呼吸はないと見受けられた。小野は、すぐに井上を呼び寄せることにした。幸い、上には協力パーティーがいたので、井上は、支点保持を交代してもらい、ただちに下降する。続いて東北大パーティーの吉木さんも下降する。そして、経過のところで記したように、体を仰向けにした後、人工呼吸およびマッサージを施す。顎の傷口から空気が漏れること、気道の確保が難しいことから、人工呼吸には困難が伴う。処置の結果、脈拍の回復が確認されたため、希望を持ったが、それも一時的なものすぎなかった。

後に、小野を心マッサージを協力パーティーの人と代わってもらい、現場の状況を記録する。細野は、滑落後、一度岩にぶつかり、そこではねかえるような感じでさらに落ち、細野が倒れていた地点であるガレたルンゼの底に達したものと思われる。滑落地点である雪渓の最上部から、細野が最初にぶつかったと思われる岩との距離(高度差)は、およそ20メートル、そこから、細野が倒れていた地点までは、さらに5メートルほどであった。(図2参照)

#### ④引き上げおよび遺体収容作業

人工呼吸は、7:50頃、救助隊員のひとりが下りてきたときまで続けられた。心マッサージも、その少し前まで続けられていた。この時点で、ラントクluftの中では手のほどこしようがないから雪渓上に引き上げるとの指示が、救助隊から出された。前述の細野が最初にぶつかったと思われる岩はテラス状になっており、それが、懸垂下降の支点(引き上げ作業の拠点でもある)の真下までバンドとなって続いている。ここに人が立ち、中継を行うことができる。スノーボードがザイルを付けて下され、まず細野を乗せる。そして上からザイルを引き上げ、前述のバンド上の中継点を経て雪渓上に引き上げる。協力者が10数名いたため、ウインチ等を使わずに引き上げができたようである。雪渓上に引き上げられた時点で、医師より死亡が確認された。遺体は平蔵谷出合までスノーボードで搬送される。ここで遺体収納袋に収められ、ヘリコプターを待つ。9:21富山県警のヘリコプター到着。遺体はヘリコプターで運ばれる。これで作業は完了し、救助隊員は帰所、協力パーティーの方々もここで解散。小野と井上は真砂沢ベースキャンプを目指した。

#### ⑤装備、その他

経過のところでも述べたように、事故の時点で使用していた装備はピッケルのみ、ザックの中に携行していたものの、ハーネス、ヘルメットは着用しておらず、ザイルも使用していない。アイゼンは今合宿では携行していない。なお、山岳警備隊から事故の後聞いた事によれば、わたしたちが今回事故を起こした中央ルンゼ取付の雪渓は、2年前にも同じような事故が発生している場所であるという。

V. 細野君葬儀関係

12日 21 頃から、上市市の真敬寺で仮通夜

12日 18 時より、細野家(川越市)でお通夜

14日 9 時、川越市の火葬場で火葬

同日 13 時より、細野家で告別式

同日 20 時頃、アメリカ滞在の山内(細野君の同期)が帰国 細野家に駆け付ける

18日 10 時より、細野家で納骨式

VI. 協力者および関係機関名簿(敬称略)

細野君遭難事故 救助活動協力パーティー(民間)	
鈴木 孝雄 名古屋山岳会	
中村 元 千葉山の会ランタン 他 2 名	
東北大学学友会山岳部 代表 山田一雄 他 3 名	
吉本 上記東北大学	
佐宗 茂 小田原クラーマーズ ズクラブ	
竹内 吉徳 佐藤 和良 丸山クラブ	
山田 義周	
関係機関	
真敬寺	
上市警察署外勤課	

富山県警察山岳警備隊 佐伯 謙一 佐伯 栄祥 古崎 富裕	
吉野 正俊 金沢大学医師 (付属病院神経内科)	
杉奈 成実 金沢大学医学部 6年	



写真1 事故現場の雪渓

## VII. 参考資料

### ① 部員構成

<<参加メンバー>>

小野 一

井上 裕之

細野 伸二

岩原 一弘

坪井 充

<<在京部員>>

内藤 久裕

高橋 弘行

<<準部員>>

鮎沢 政文

<<部長>>

石 弘光 教授

勤務先:

自 宅:

<<在京連絡先>>

勤務先:

⑶)

自 宅:

※計画書に記した学年は在学年数であり、実際に在籍する学年とは異なる場合があります

②夏合宿前半日程計画表(実働10日、休養1日、予備日2日)

1日目:入山:室堂～別山乗越～剣沢～真砂沢ベースキャンプ(BC)

2日目:雪上訓練:歩行、ピッケル・ストップ、ザイル・ワーク

3日目:雪上訓練:平蔵谷～本峰アタック～長次郎谷下降

4日目:小縦走1日目:BC～平蔵谷～早月尾根下降～馬場島～百萩川林道

～小窓乗越～池ノ谷(ビバーク)

5日目:小縦走2日目:池ノ谷BC～池ノ谷左俣～剣尾根R2

～剣尾根上半縦走～長次郎谷下降～BC

6日目：ハツ峰縦走：BC～長次郎谷～ハツ峰ⅠⅡ峰間ルンゼ～下半縦走

～VⅥのコル～上半縦走～長次郎谷下降～BC

7日目：休養日

8日目：源治郎尾根縦走 本峰南・北壁岩登り：

BC～源治郎尾根～本峰南壁A1（小野、細野、岩原）

～本峰北壁L2（井上、坪井） ～本峰～長次郎谷～BC

9日目：ハツ峰Ⅵ峰A、Cフェース岩登り

魚津高ルート(A)～RCCルート(C)（小野、井上、坪井）

剣稜会ルート(C)～魚津高ルート(A)（細野、岩原）

10日目：上級生岩登り：チンネ左稜線（小野、井上、細野）

下級生縦走：BC～二俣～仙人池～仙人温泉（往路を戻る）（岩原、坪井）

11日目：上級生岩登り：源治郎尾根下部中央ルンゼ～上部成城大ルート

～Ⅰ峰～Ⅱ峰～アプザイレンのコル～長次郎谷～BC

下級生休養日

12、13日目：予備日

③後半縦走日程計画表(実働7日、予備日2日)

真砂沢BC～薬師岳～赤木沢遡行～雲ノ平～槍ヶ岳～奥・西穂高岳～上高地

④夏合宿前半定着日程記録表

8月2日：入山：計画通り

3日：雪上訓練：ほぼ計画通り

4日：雪上訓練：計画通り(帰路、ピッケルストップの練習)

5日：小縦走：(岩原の足の調子が悪く、途中で断念)

BC～平蔵谷～早月尾根下降～早月小屋(ビバーク)

6日：小縦走：早月小屋～早月尾根登高～剣岳頂上

～長次郎谷下降(帰路、搬送の練習)～BC

この時点で、岩原の足の調子は思わしくなく、彼が2日連続休養できるように日程を組み直す。なお、準部員の鮎沢は、個人山行で5日真砂BCに到着。幕営。6日鮎沢は、ハツ峰北面滝ノ谷左壁どんぐり第一ルートを単独登攀。

7日：上部生岩登り：チンネ左稜線（小野、井上、細野）

坪井は、鮎沢にハツ峰Ⅳ峰Cフェース剣稜会ルートに連れていってもら

(予定外の行動)

岩原は休養

8日: 全員休養(計画通り)

鮎沢、奥鐘山に出発

9日: 八ツ峰下半 (天候、岩原の足の調子の関係上、V VIのコルで打ち切り、下山。  
上半は、計画段階9日目のVI峰フェースのうち1本をカットし、  
その日に縦走することにする。)

10日: 源治郎尾根縦走、本峰南・北壁岩登り

11日: 八ツ峰VI峰A、Cフェース～八ツ峰上半(全員で縦走)

(魚津高(A) (小野、井上、坪井) 剣稜会(C) (細野、岩原))

(この日は計画段階の9日目に当たる日を一部変更したものである)

12日: 上級生岩登り (小野、井上、細野) 途中で事故発生

下級生縦走 (岩原、坪井) BC～二俣～仙人池～仙人温泉(復路同じ)

(予定通り)

小野、事故後下山

井上、岩原、坪井: 真砂沢～剣沢小屋

13日: 井上、岩原、坪井: 室堂へ下山

※なお、気象・記録担当は細野君自身であったため、天候等について詳細は不明

以上

一橋大学山岳部

〒186

東京都国立市中 2-1 一橋大学内

一橋大学山岳部

部員の連絡先は本文Ⅶを参照

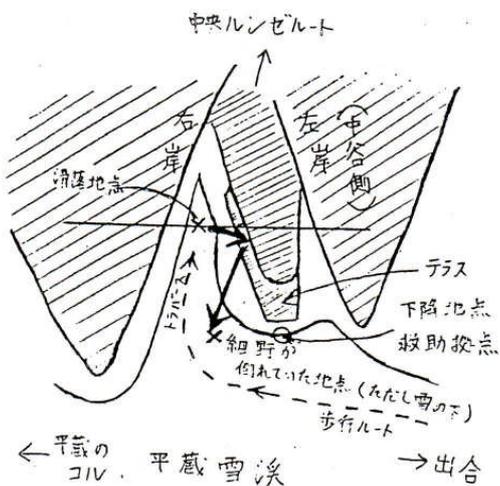


図1、現場付近平面図

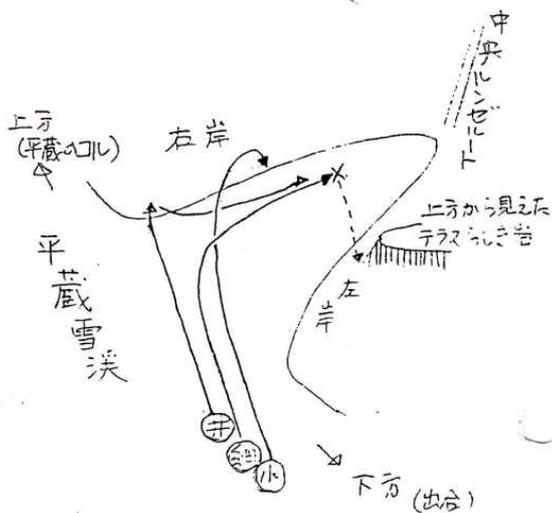


図3 事故直前、2名の行動図

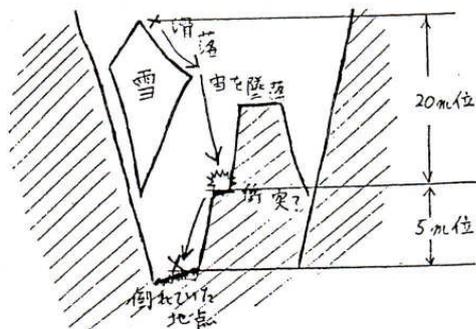


図2、現場付近断面図  
(図1中の実線で切ったもの)



図4 事故発生時の3者の様子